
次は何をしようかな？

羽仏 幻呉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次は何をしようかな？

【Nコード】

N7969S

【作者名】

羽仏 幻呉

【あらすじ】

色々変な事をする中学二年生。

・・・何が起きたんだ！？何で自分はこんなところにいるんだよっ！？

もう一度言っぜ？！なんで自分は『未来』にいるんだよぉ！？

何やら身体能力が高い男の子が未来に行ってしまう、そんな話です。

大変な学校。(前書き)

三人称での挑戦を少しっ！

大変な学校。

キンコンカーンコン

そんなありふれたチャイムの音が中学校の校舎に響き渡る。

なぜチャイムがなったかというそれは掃除の時間を知らせる為のチャイムであった。

校舎の中を歩く生徒は口々に先ほど迄の授業の感想を述べる。

大体が「めんどくせー」である。

そして掃除の為に教室から出て行く生徒たち、それが廊下にあふれる。

しかし掃除の時間になっても机に倒れ伏している生徒が一人。いや、倒れ伏しているのではなく正確には机に上半身を預け、両腕を机からだらつと下ろし顔を机に向けている。

ああ、それが倒れ伏していると言うのか。・・・・失敬。

掃除が始まって教室の上部に取り付けられているスピーカーから掃除を促す為だかなんだか知らないが軽快な音楽が流れる。

しかしその音には目をくれずひたすら机にだれている少年。器用に消しゴムを耳に取り付けている。

・・・・取り付けている。それであっていると思う。

その様子を見兼ねたのか一人の男生徒がため息を一つ吐いてその生徒の方に歩く。

そしてその生徒の席の横に来たその男生徒は、その少年の耳についた消しゴムを・・・・

グッ

押し込めた。

それに驚いたのかその少年は椅子ごと派手な音を立て後ろに倒れた。その少年は倒れた事は気にせず耳の押し込まれた消しゴムを焦っ

た顔して取りにかかる。

それに笑いを抑えられなくなったのか男生徒はカラカラと笑う。

「お前なにしゃがる！？俺の崇高な睡眠を妨げるなんて真似を！？」
耳に押し込まれた消しゴムがやつと取れたのか少年は批判の声を上げる。

「お前さんが崇高な睡眠とやらを取っているから我輩はそれを起こしてやったのだ。」

慣れた口調でその批判には目をくれずエツヘンと胸を張る男生徒。

「俺があんな無知の呪文をわかるわけないだろうがっ！これは何だ？魔道書か？魔法の教科書か何かか？！」

少年は机をあさり、何かを男生徒の前に出す。

・・・しかしそれはどうみても英語の教科書。

男生徒はそれを見て壮大なため息をつき、英語の教科書をはたき落とす。

「魔道書？ありがち嘘ではないと思うがね・・・ああそんな事はどうでもいいや・・・速く！」

男生徒はこれまた慣れた口調で一気に幕したて最後に机をビシと音がるほど指差した。

「へいへい・・・分かりましたよ」

少年はめんどくさそうに英語の教科書を拾い、机を後ろに下げた。

キンコンカーンコン

「終わったアアアア！！！」

チャイムがなった瞬間に少年は椅子から立ち上がる。

因みにこれは帰りのチャイムだ。

少年はさっきのゴタゴタの後にはいろいろな人にあれしろ、これしろと言われまくったのである。

中には塵取りをしるやら箒で掃け、などと言った普通の物から酒買つてこいやら何やら半ば強制的な事もやらされたのであった。

あまり深くは探らないで置いてあげて欲しい。

そのため彼が帰れる時間になったチャイムは拘束終了時刻を示す重要なチャイムであった。

だからって帰りの会の途中で奇声を上げながら立ち上がるのはどうかと思う。

彼は数秒間その奇声を上げた姿勢を保ったがすぐに何事もなかったように座る。

そして帰りの会は何事もなかったかのように進んだ。

「やあーつと終わったぜ・・・」

少年は大きな伸びをして帰りの会の終わった教室に一人残っている。大体の生徒は部活動のため足早に教室を去って行った。

しかし彼は部活には所属はしていない。あえて言おう、帰宅部である。

読んで字のまんま家に直行で帰る事である。

帰宅部はキモいだのなんだの抜かす輩はたまにいるが大抵の者が

『家に帰るのがいったい何がいけないんだ？』

という言葉を聞くと納得するという伝説があったりなかったり。

彼はクラスの嫌われ者でもないがクラスのムードメーカーでもないので中立の立場だ。

事実だけいうとあまりクラスに貢献していない。

まあたまに変な行動をするのが玉に瑕だが大抵の生徒はもう二年になって1ヶ月経っているのもう突っ込まない。

たまにその行動に突っ込んで行く者もいるが大抵の場合、撃沈する。それ程に彼の変な行動は底が見えないのである。

少年は帰りの準備ができていなかった為に残っている様子。

しばらく経つと彼は大きなバックを持って自分の席を立つ。

基本彼は全てをバックに詰め込んでいる。主に夢と希望が・・・は、

冗談として全部の教科書を詰め込んでいる。

「よつこら・・・っと」

大きなバツクの為に少しふらつきながら彼は昇降口を目指す。

「ふああああ・・・」

彼は基準服の両ポケットに手を差込んで昇降口で大あくびをする。

基本的に彼はあまり長くは眠れないのだ。

なので大あくびくらいは出る・・・はず。

「ああ〜っと」

あくびを終えて彼は上履きを脱ぎ、靴を出し、それを履く。

・・・という動作は今日は出来なかった。

最後の工程のはずの靴が見当たらない。

彼はあまりにもクラスに貢献していないので不服を言う輩を少なくはない。

「ああ・・・またあいつか？」

少年は検討がついているのか一瞬で言葉にする。

あいつと言うのは女子だ。名前は彼は覚えていない様子。

女子と言っても大半の男子が持っている幻想をぶち壊してくれるぐらいの事は平気でやる。

その女子は何故か少年の靴を隠すのだ。

「んー・・・ここか？」

と言って少年は昇降口に掛かっている掛け時計の上に目をやる。

しかしその周辺には足をかける事のできる物は一切なし。

「どっこいしょ」

気の抜けた声とは裏腹に凄い行動をした。

簡単にいうとマリオよろしくの壁ジャンプ垂直バージョンである。

彼は基準服で黄色の上履きのまま壁を登った。

そして彼の手には見覚えのある靴が握られている。

「よし。これで帰れるぞ」

と足早に昇降口に向かい、靴を履き外への扉を開けた。

「マジかよ」

少年は人から見てもわかるような嫌な顔をする。

少年の目の前には『現在工事中』の看板。

大きなバックを持った彼は早く家に帰りたいかっただけで大きなため息をつく。

「じゃあねえか」

少年は嫌そうな表情を顔いっぱい貼り付け道を戻る。

そして彼は横道に入った。

大変な学校。(後書き)

難しいなあ・・・

未来へ。

「こっから帰るしかねーか・・・遠回りだな」

彼はさっきの工事中の看板に悪態を尽きながらも横道にはいる。

横道と言っても彼が勝手に呼んでいるだけで正確には建物と建物の間、路地裏を現在通っている。

彼が言うように遠回りと言うのはこの横道を通ると家に帰るルートがいつものルートより長くなってしまふのだ。

「おつとつと」と

狭い道であるがゆえに時々彼の基準服やバックなどがガリつと壁に当たる音がする。

それと足元にはゴミが落ちていたりしているらしく少年はそれをよける為に壁などに当たってしまう。

「帰ったら拭かないとな」

少年はそういいため息をつきながら歩いて行く。

「やっとここ迄来た・・・」

軽く怠くなった身体を引きずりながら横道の外に出る。

怠くなった理由は他でもない。労働だ。

あんなわけの分からん文を勉強しろなんて出来るか？いや、無理だね。

「ったく・・・何だよ酒買ってこいって・・・それでも教師かってえの」

マジで先生が酒買ってこいって言うのはいつもの事なんだけどね。

悪態をつきながらも歩いて行く。

そして一軒の家の前に着いた。その標識には『如月』と表記されている。

自分はその家のポストを漁る。・・・いや自分の家ですからね？

「んゝ特には入ってねーな」

少年はポストを漁る手を止め家の玄関の方に歩いて行く。

少年は引き戸に手を掛けガチャッと金属音を立てた扉を開け

「只今帰りましたゝ！」
と大声で叫ぶ。

「あれ？居ないのかな」

少年は反応がない事に少し疑問に思ったらしいが直ぐ様家の中にはいる。

玄関には靴がなかった為少年は「ああ」と納得の声を上げる。

「確か今日は出かけるとかなんとか言っていたような？」

・・・納得したのかしていないのか。そこは少年にしか解らない。

「早く着替えよゝっと」

少年は靴を綺麗にピシッと並べ、玄関の直ぐ目の前にある階段に上がる。

一段一段階段を踏みしめ登って行く。

しかし彼は後数段というところで足を止めた。

「兄貴も居ないのか？」

いつもなら家でゴロゴロと漫画を読んで居るはずの兄が今日は見たらなかった。

兄の部屋は階段の直ぐ目の前でいつもドアが全開で空いているから少年は兄が居る事を認識ができた。

しかし今日はいつも全開のはずのドアが空いて居ないでしまっている。

なので少年は足を止めたのだ。

「んゝやっぱり居ないか」

階段を数段上がり兄の部屋のドアを開け中をしてみるがやはり居る気配が無いので少年は扉を閉めた。

兄も居ない事に少し疑問に思った少年だったが直ぐに兄の部屋の隣の自分の部屋の扉に手をかける。

「ふうっと」

少年は直ぐにドアを開けて直ぐの机の足元にバックをドサツと置いた。

一息居れずに直ぐに制服を机の上にあるロフトベッドのへりに掛ける。

そのままの勢いで白いＴシャツと黒い長ズボンを着る。

「やはり居ないか」

少年は直ぐに下に降りて台所やリビングなどを探して声を上げる。

「やっぱり今日はみんなを居ない日？」

と少年は腕を組み首を横に傾ける。

「寝るか」

すぐに探す事を諦め自分の部屋に戻り、部屋のドアを閉めた。

ロフトベッドのハシゴの前で大きく深呼吸をしてからハシゴを登る。そしてもう敷いてあった布団に入る。そしてすぐさま眠気が襲って来た。

ピッ・・・ピッ

そんな機械の音で意識が覚醒する。

「・・・・・・・・」

目覚まし時計でも鳴っているのだろうか？

それを確かめる為に目を開く。しかし目の前には違った景色が広がる。

目を開くとそこは真っ白い天井が見えた。

（白い天井？）

まだあまり覚醒しきっていない意識をフル稼働させ考える。
しかしそれでも解らなかつた為周りに目を向ける。

天井と同じ白一色の壁と床。左に目を向けると自分の腕から伸びる点滴の管があつた。それと病院においてありそうな機械から音がなっていた。さっきの音はこれだったらしい。それにこれまた真っ白なベッドに横たわっている。・・・・・・・・え？

「病院？」

完璧に覚醒しきつた意識で考える。

（自分が病院？何故だ？自分は確か・・・）

考える為に身体を起こし腕を組む。

「分かん」

しかし結論が出ない。

「まあしかし寝れるんだし？」

と考えを放棄して立てていた上半身を寝かせ、目を閉じる。

これが夢である事を信じて。

質問を。

「ん・・・」

少年は目を覚まし起き上がる。

さつき見たものがあまり変わらずそのままにある。

白い壁、白い天井、何やら機械。

しかし一箇所違う点があった。

なにやら椅子に座って驚いた表情の白衣を着た人。

「目が覚めたようだな」

声を掛けられた少年は白衣の人の方をみる。

容姿は黒髪の短い髪型でヒゲを完璧に剃ってるっぽい感じ。

それに整った顔と少し細い目の人。

「はい・・・覚めましたが・・・」

少年はその人を見据える。

白衣の人は少し少年を観察するように見る。

「言葉は喋れるようだな」

といつから持っていたのか紙をそばにあった机において書き始めた。

「はい、まあ」

自分は日本人だから日本語はわかるが・・・

自分は少し見つめる。

白衣の人は書く手を止めこつちを向いた。

「さて、まず質問をするよ」

白衣の人はすぐかけるように腕は紙の上に置いてある。

「まず、君の名前はなんだい？」
「如月 辰也です」

これには即答出来る。自分の名前だからね。

「ふむふむ・・・」
「・・・」

白衣の人が書いている物を見つめる。

「よし、じゃあ思いつく限りの自己紹介をして？」
「はい・・・」

少し不振に思うぞ。えー・・・っと・・・

「神奈川県出身、14歳で中学生・・・ぐらいですかね」
「神奈川県かい？」
「はい、神奈川県です」
「14歳で中学生？」
「そうです」

少しのやりとりの後白衣の人がまた書き始める。
・・・なんか変な顔してるが？

「じゃあ今は何月？」
「えーっと確か五月です」
「ご名答。・・・では何日？」
「え、えーっと・・・12日？」
「正解だ。・・・君は男？」
「は？・・・はい」

「ウム・・・では日本の首都は？」

「東京です・・・ね」

「では東海地震が起きたのはいつ？」

なにやら変な質問をされたが・・・ん？引っかけ問題かな？

「嫌ですねえそんな引っかけだしても引っかけませんかよ？」

「・・・・・・・・」

（はいい？）

間違っていない自信はたっぷり。

「最近起きた地震は？」

「東日本大震災・・・ですか？」

「うん？もう一度言ってみてくれる？」

「・・・東日本大震災？」

「うん？君の生年月日は？」

なんですか？その流れで生年月日？

まあいいか。

「えーつと1997年3月29日ですよ？たしか。」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・はい？」

は？あっていると思うんですが？

「・・・・・・・・僕はいくつに見える？」

「は？あーっと・・・20くらい？」

「生年月日はいつだと思っ？」

「はい？・・・わかりませんが？」

「2056。だよ」

「は？」

なんだこの人？俺より年上でそんななの？

「はい？」

「と言うことは、君は僕より年上と言うことになるね」

「計算上ではそうなりますね」

すると白衣を着た人は急に立ち上がり病院にありそうなスライドドアを開けて出て行きそうになる。

・・・え？

「待ってください！」

まだ把握出来てないぞ？

しかしその声は届かなかつたらしく、無残にもしまるドア。

「・・・何だってんだ？」

病室の中に取り残された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7969s/>

次は何をしようかな？

2011年10月8日20時07分発行